

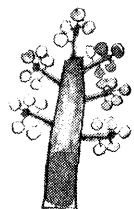
## 鯉のぼりとブリキの剣

五月近くになると、北陸のちいさな村にも、春はめっきり色濃くなってくる。遠い山の雪も少なくなり、黄や桃色の花が田んぼのあぜや山すそに咲きみだれる。

子どもたちは学校からかえると、先を争って外へ出る。その兄や姉たちの帰りをまちかねていたちいさな子も、その後についてゆく。せりをつんだり、たんぼを胸につけたり、色がきれいなレンゲの花をさがしたりする。土手にのぼると、鉄橋が赤く見え、貨物であるうが客車であるうが、ともかく列車が通りさえすれば、声をかぎり両手をふって万歳をさげんだ。日だまりに出てくるいたどりのふとい芽のシャリシャリとしたすっぱさと、ちがやの若い花の銀色のほの甘さが、子どもたちのそのころの季節のおやつだった。

あそびに夢中になっている私が、母によれば、後髪をひ

か  
こ  
さ  
と  
し



かれるおもいでかえると、タンスの中からのシャンとした着物に着がえさせられ、地主さんの家に行くのだからいっしょにおいでということだった。母に手を引かれながら、遠くの子どもたちの声をうらやましげに見返りながら、田の道を通ってゆくと、石垣をめぐらせた白壁の家がみえた。庭すみに大きな丸太がたっていて、それにつけた鯉のぼりが風にゆれている。まっすぐつけたのでは、余ってしまうのか、丸太のてっぺんから左右にひっぱったなめの綱に、大きなのから順にたくさん鯉のぼりがつけられている。こんなにたくさん鯉のぼりを、いったい何人の子どもたちがいるのだろうかと思つて、だんだん近づく鯉のぼりの数を十六ほどまでかぞえていると、母が何やらの書き付にはさんだお金を私に渡し、おとさないようにするんだよと念をおして、私一人をその鯉のぼりの家へ行くようにおし

やった。

石の段々をのぼって、黒光りする玄関の戸をひくと、思いがけないほどすーとあいてしまう。つめたい玄関の大きな石の上にのったものかどうかと考えながら、それでもせいいっぱいのこえで「ごめんください」というが、しんとして、奥の方から誰も出てくる気配がない。困った私は、またせいいっぱい「ごめんください」と呼ぶ。とおくでハイというちいさな声が出たので、ほっとしているとやがて若いきれいな人が出て来る。「おそくなりました」と母におそわった通りの口上をいっしょうけんめいに言って、これまたしつかりにぎって来た、書き付とお金をさし出す。女の人はそれをもって奥にきえる。これで役目はすんだという安心感から、私はそつとあたりを見回す。大きな植木鉢と画があつて、こんなにひろい玄関なら雨の日に遊ぶのにどんなにいいだろうかと考えていると、急にバタバタという足音がして、私よりちょっとちいさな子が、ブリキの刀をもって玄関の間を右から左へはしりぬけた。そのはしり去った奥をのぞいていると、女の人がさっきの書き付をもつてあらわれた。そして「ごくろうさんでした」といってお菓子の紙つつみを私の手にもたせた。もらったものか

どうかもじもじしていると、ふいに女の人のうしろから、さっきの男の子が抜身の剣を「ヤイノ」と私に向かってつき出した。私はおどろいて玄関をとび出てまっている母の所にかけて行つた。

かえり道、そのななめの綱につるしたたくさんの鯉のぼりと「ヤイ」とつき出したブリキの剣がいつまでも私の心に残っていた。

それ以来、地主さんの所へ地代をもってゆくのはいつも私の役目になった。帰りぎわにもらえるお菓子のうれしさに、内心よろこびながら、ヤイといった男の子を半分おそれねたみながら、六歳のときからほぼ二年、私はその石がきの家を毎月訪れた。

五月といえば私は四十年前のこの北陸の春を、そしてたくさんの鯉のぼりとブリキの剣をなつかしく思いおこす。今年も家々に黒や赤の鯉のぼりの季節となった。私の心の中にもあやしく鯉のぼりが泳ぎ、ブリキの剣がキラリと光ることだろう。

(児童文化研究)